岩手県平泉町文化財調査報告書第135集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ

―― 第10次調査 ――

2020
令和2年3月

平泉町教育委員会

岩手県平泉町文化財調査報告書第135集
名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ
―第10次調査―
令和2年3月
平泉町教育委員会

岩手県平泉町文化財調査報告書第135集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ

―― 第10次調査 ――

２０２０
令 和 ２ 年 ３ 月

平 泉 町 教 育 委 員 会

観自在王院全景（南から）

調査区全景（南から）

土塁と溝（奥は既整備範囲　西から）

土塁と溝（西から）

序

町内には、特別史跡中尊寺境内・毛越寺境内附鎮守社跡・無量光院跡、史跡柳之御所・平泉遺跡群、達谷窟、金鶏山、特別名勝毛越寺庭園、名勝旧観自在王院庭園・おくのほそ道の風景地など奥州藤原氏に関連する数多くの国指定文化財が狭い町域に分布しています。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』文治五年(1189)九月十七日条の「寺塔已下注文」に、観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安部宗任の娘）が建立したことが記されています。

観自在王院跡は、昭和27年に国の特別史跡毛越寺跡附鎮守社跡の一部として指定されました。昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた調査では、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認されています。平成17年には旧観自在王院庭園として名勝に指定されています。

当町では、遺跡の重要性に鑑み昭和47～53年度にかけて地元の方々のご理解とご協力を得ながら史跡整備を進め、史跡の恒久的な保存措置を図っております。平成27・28年度に史跡南西側の公有化を実施したことを契機に、前回の整備完了から約40年が経過していることから、平成30年度より再整備を視野に入れた内容確認調査を開始しました。

本報告書は平成30年度に実施しました第10次調査成果を収録したものです。本次調査では、観自在王院跡の南側を区画する塀跡や造営時の整地層とともに、塀跡南から毛越寺及び観自在王院跡の南に隣接する東西大路の北側の側溝を確認しております。

観自在王院跡保存修理事業につきましては、地域住民の方々をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました文化庁・岩手県教育委員会・平泉遺跡群調査整備指導委員会・宗教法人毛越寺に対し深く感謝申し上げます。

令和２年３月

平泉町教育委員会
教育長　岩　渕　　実

例　　言

1　本書は平成30年度の国庫補助事業により実施した名勝旧観自在王院庭園第10次調査の報告である。
2　野外調査期間は平成30年10月29日から平成30年12月３日までである。室内整理期間は平成31年３月29日までである。
3　調査地点は岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山地内である。調査面積は約185㎡である。
4　発掘調査の主体は平泉町教育委員会である。

平泉町教育委員会

教育長	岩渕　実		
平泉文化遺産センター			
所長	及川　司		
所長補佐	高橋国博	補助員（臨時）	千葉京子
主任主査文化財調査員	菅原計二	補助員（臨時）	佐藤昌弘
主任主査文化財調査員	鈴木江利子	補助員（臨時）	熊谷明美
主査文化財調査員	島原弘征	補助員（臨時）	菊地道子
文化財調査員	鈴木博之		
主事	那須駿也		

5　発掘調査・室内整理は島原・鈴木江利子が担当し、菊地の協力を得た。事務は高橋が担当した。
6　本書の執筆は、島原・鈴木江利子が担当した。編集は島原が行った。
7　調査の基準点は平成30年に無量光院内に設置した基準点（平面直角座標Ｘ系に準拠）をもとに調査員が打設した。
8　土層観察の土色は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄2001）によった。
9　調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会、平成30年度平泉町内遺跡調査報告会等で公表している。上記と内容が異なる場合は本書が優先する。
10　発掘調査及び室内整理にあたっては、次の方々ならびに機関からご指導とご協力を賜った（順不同・敬称略）

宗教法人毛越寺、文化庁、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

11　出土遺物及び写真・図面等の調査に関わる資料は平泉町教育委員会が保管している。
12　発掘調査参加者（順不同・敬称略）

阿部俊春、石川厳覺、及川勝、小野寺孝一、小野寺富子、小野寺友子、小野寺美恵子、菊地道子、小岩佳ゑ、小松代方代、佐々木政記、佐々木利雄、佐々木直久、佐藤潔、佐藤國雄、佐藤彦悦、佐藤参、佐藤正志、菅原まつ子、菅原有利、鈴木健一、高橋純一、瀧澤昌治、田村功、千條あえ子、千葉明弘、千葉一男、千葉勝也、千葉京子、千葉セツ子、千葉哲夫、千葉ナカ子、千葉光春、千葉正行、千葉衛、千葉みよ子、千葉義男、千葉善信、鳥畑惠美子、橋階義彦、丸山聡子、吉田琴子

目　　次

Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査の概要……3
　1　調査目的……3
　2　調査方法……3
Ⅲ　調査の成果……3
　1　検出遺構……3
　2　調査概要……3
　3　出土遺物……5
Ⅳ　まとめ……6

表　目　次

第１表　かわらけ観察表……13
第２表　中国産磁器観察表……13
第３表　国産陶器観察表……13
第４表　瓦観察表……13
第５表　銭貨観察表……13
第６表　石器観察表……13

図　　版

第１図　平泉町の位置……1
第２図　観自在王院跡第10次調査位置図……2
第３図　観自在王院跡第10次遺構配置図……7
第４図　北・南区平面図……8
第５図　東区平面図……9
第６図　西区平面図・溝跡断面図……10
第７図　北・北区東トレンチ断面図……11
第８図　東・南・西区断面図……12
第９図　出土遺物……13

写　真　図　版

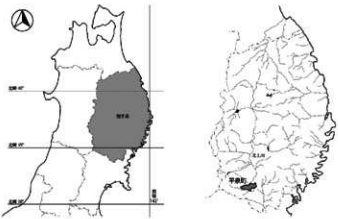
写真図版１　南・北区（１）……16
写真図版２　南・北区（２）……17
写真図版３　南・東区……18
写真図版４　北区……19
写真図版５　土塁跡……20
写真図版６　北区・北区東トレンチ……21
写真図版７　東区……22
写真図版８　東・西区……23
写真図版９　調査前状況・遺物出土状況……24
写真図版10　出土遺物……24

Ⅰ　位置と環境

1　観自在王院跡の位置

平泉町は岩手県南部、北上川中流域に位置する人口約7,500人、面積約64平方kmの小さな町である。南は一関市、北は奥州市に接している。12世紀には奥州藤原氏の拠点として栄え、中尊寺や毛越寺庭園を始めとする数々の文化財が残り、往時をしのばせている。

観自在王院跡は毛越寺の東隣に位置し、周辺には住宅や水田が広がっている。



第１図　平泉町の位置

2　観自在王院跡の現状

平泉は平安時代末の約100年間、東北地方を勢力下に置いた奥州藤原氏の拠点であり、当時の痕跡を多く残している。その一つである観自在王院跡は、毛越寺の東隣に位置する。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安部宗任の娘）が建立したことが記されている。

境内の大きさは南北250m、東西120mを測り、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂などの主要堂宇が建ち、その南側には中島を擁する舞鶴が池と呼ばれる大きな園池が位置する。

昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた調査では、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認された。昭和47～52年には史跡整備に伴う内容確認調査が行われ、新たに西門跡、導水路、牛車を収める車宿が見つかっている。池の水は池西側にある滝石組から供給されているが、滝石組に接続する導水路は西側土塁付近を暗渠がくぐり、毛越寺裏にある弁天池を取水源にしていることが確認された。なお、暗渠に用いられた材木は全てクリ材であった。

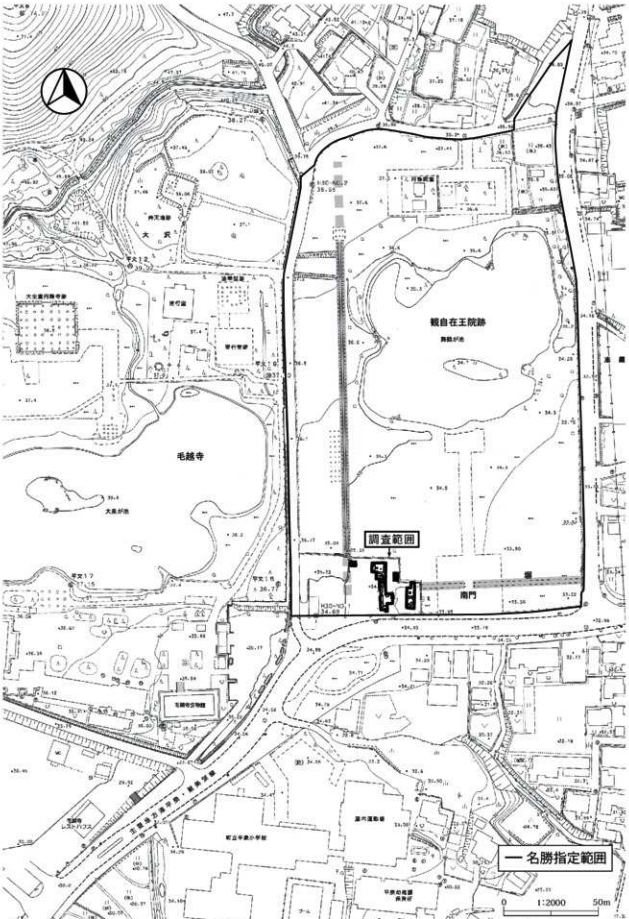
前述の平泉遺跡調査会による調査の後、平泉町は「平泉町文化財保護基本計画」を策定し、「観自在王院跡保存整備計画」に基づき観自在王院の復元的整備を実施することとした。計画は①土地の公有化と整備、②文化財の管理保護、に重点を置いたもので、文化財に対する国民の親しみと理解を深めることがねらいであった。土地の公有化は昭和42～50年度まで行い、整備事業は一部公有化と同時進行となるが、昭和49～53年度に実施している。

その後、平成17年に名勝旧観自在王院庭園として指定され、昭和27年の特別史跡指定と併せて、史跡・名勝の二重指定を受けた。平成27・28年には昭和の整備の際に公有化できなかった史跡南西側の公有化を実施し、将来的には史跡南西側の整備を目指して、公有化した部分の内容確認調査を平成30年度より開始することになった。

また、平泉で最初期に整備された庭園であり、整備完了から40年が経過し老朽化等の問題を解消するための再整備が求められている。

参考文献

藤島亥治郎1961 『平泉　毛越寺と観自在王院の研究』
平泉町1979　　『観自在王院跡整備報告書』



第２図　観自在王院跡第10次調査位置図

Ⅱ　調査の概要

1　調査目的

将来的な史跡南西側整備を目指した内容確認調査で、今年度が初年度にあたる。観自在王院跡はこれまで、平泉遺跡調査会・平泉町教育委員会によって今回の調査を含め10回の調査が行われてきている。10次調査は、観自在王院跡南西側を対象に調査を行った。

2　調査方法

グリッド　今回の再調査に併せて観自在王院跡の周辺に基準点を打設し、遺構実測や遺物出土地点の記録等の実測作業の基準とした。

なお、平成20年６月14日に発生した岩手・宮城内陸地震において、調査区周辺では西北西方向に約20cm、平成23年３月11日に発生した東北太平洋沖地震によって、南南東へ約2.7mずれていることが確認された。よって、今回の基準点の数値は、周辺の調査成果との整合ができるよう変動前の数値(測地成果2000)に変換した測量成果を使用している。

粗掘・検出　遺構検出面まではスコップもしくは移植ベラで表土層を剥ぎ、遺構や層位の確認を進め、鋤簾等で遺構検出作業を行った。

精査　基本的には検出に留めた。ただし、遺構の年代・層序等を確認するため整地層・溝は部分的にサブトレンチを入れ、柱穴は半裁までに留め調査を行った。

記録　遺構の実測は、平板測量もしくはグリッドを１×１ｍに分割したメッシュを用いて測量した。遺構写真は35mm版カメラとデジタルカメラ（ニコンD90）をメインカメラとし、遺構及び調査全景写真時には、メインカメラに加えて６×７版カメラ（リバーサル）で撮影を行った。

埋め戻し　山砂で遺構面を覆い、その上に調査で掘削した土を埋めた。

普及活動　現場は随時公開し調査に支障がない範疇で説明等を行った。調査成果は、「広報ひらいずみ」及び平成30年度町内遺跡発掘調査報告会等で公表している。

Ⅲ　調査の成果

1　検出遺構

検出遺構は整地層、土塁跡、溝跡２条、柱穴６個である。

2　調査概要

（1）概要

観自在王院南西側は、毛越寺と観自在王院跡との間に南北方向の町道と観自在王院南隣を東西方向に通る県道との交差部分である。この町道と県道は、12世紀の南北道路及び東西大路と場所が概ね一致し、12世紀当時の平泉の都市景観を考えるうえで重要な場所である。今回内容確認調査を開始するにあたり、①道路の交差部分の状況、②観自在王院の西・南側の区画施設を確認することを主眼とした調査計画を立てた。初年度の10次調査では観自在王院南側の区画施設及び南に隣接する東西大路の北側道路側溝の把握を目的に、大きく４か所のトレンチを設け遺構の位置及び残存状況を確認することとした。

○東区

調査対象範囲の東に位置し、南北14m、東西１～２ｍの南北方向に細長い調査区である。東側と北

側は史跡公園として公開されている既整備範囲に囲まれ、境には側溝が巡っている。南側は東西方向に通る県道で一段高い状況となっていた。公有化前は水田として土地利用されており北側畦畔は周囲より一段高く、観自在王院南側を区画する土塁の基底部の検出が期待された。調査の結果、１号溝と土塁の基底部端を確認している。

○北・南区

東区西に位置する。調査前は大半が畑及び宅地として土地利用され、現況では東区より一段高くなっていた。観自在王院南側の土塁と区画内部の状況及び道路側溝の位置確認を目的に南北26m、東西3～7mの南北方向に細長い調査区を設けたが、中央付近に既存の排水路があり、それを境にして調査区を分け北区・南区と呼ぶことにした。この排水路は、観自在王院南側を区画する土塁の位置に相当し、結果的に土塁の中央を掘りこんでしまっている。12世紀当時の区画が現代まで続いている証拠ともいえる。調査の結果、北区では整地を確認し、その広がりを追跡するため北区東トレンチを設けた。南区では１号溝を確認している。地山は南の県道側に下がっており、12世紀以降近現代まで複数回の整地が施され、最終的に80cm程度の盛土厚が確認された。

○西区

北区から西に９m、北側の既整備範囲からは３m南に調査区を設定した。この部分は観自在王院の西側を区画する南北方向の土塁が残存しており、今回は東側裾の位置において小規模な調査区を設け、次年度以降の調査計画に反映させることを目的としている。ここからは、２号溝を確認している。

（2）溝

２条検出した。属性は観察表を参照していただき、本文中ではそれ以外の部分について記載する。

１号溝（10ＳＤ１）（第３～６図、写真図版３・７・８）

遺構名	全長(m)	幅(m)	断面形	深さ(cm)	方位	検出面標高(m)	底面標高(m)
10SD1	[18.5]	0.33～1.04	逆台形	3～37	N－85°－E	33.62～33.76	33.29～33.70
10SD2	[3.2]	0.8～0.9	逆台形	20～35	N－86°－E	34.37～34.40	34.05～34.16

＜位置・検出状況＞東区の中央北及び南区中央において検出した。観自在王院の南側を区画する土塁の裾から溝中心まで東区で５m、南区で4.7～4.8m程の距離に位置する。検出面は地山である。この検出面は西から東に向かって緩く傾斜しており、南区と東区の高低差は最大14cmを測る。東区の検出状況は良好であったが、南区では後世の削平が著しく残存状況は不良である。＜新旧関係＞無。

＜埋土＞断面は逆台形状を呈し、堆積状態から２回以上の浚渫の跡が認められる。

＜底面＞西から東に向かうにつれて低くなり、高低差は41cmを測る。＜出土遺物＞かわらけ細片１点と植物遺体（桃類の種）が出土した。かわらけは調査がトレンチであったこともあり細片１点のみであった。

＜まとめ＞昭和30・50年に行われた南門付近の発掘調査では南門と土塁（築地塀）とともに、門柱から4.8m南において東西方向の溝を確認している。溝の方向性と土塁との位置関係から、前述の調査で確認した溝と１号溝は一連の溝である可能性が高い。

２号溝（10ＳＤ２）（第３・６図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞西区中央において検出した東西方向の溝である。観自在王院の西側を区画する土塁の東隣りに位置し、人為的に埋め戻されていた。なお、土塁との新旧関係は方向的に交錯することから同時期ではなく古いと考えられる。＜新旧関係＞無。＜埋土＞上層は黄橙～明黄褐色粘土を主体とした人為堆積、下層は砂を多く含んだレンズ状の自然堆積を呈する。

＜底面＞西から東に向かうにつれて低くなり、高低差は11cmを測る。＜出土遺物＞無。

＜まとめ＞12世紀に帰属する溝であるが、人為堆積を呈すること及び位置関係が観自在王院の西側を区画する土塁と交錯することから、観自在王院以前の溝となる可能性がある。

（3）土塁跡（第3・4・5・7図、写真図版2・3・5）

東区北側には土塁跡の残りと考えられる僅かな高まりを検出している。幅は30～50cm、高さ13～15cm（標高33.86m）の小山状の断面で、東西方向の距離は1.9mである。

北区では南区にまたがって検出している。幅4.5m、高さ40～50cm（標高34.18m）の高まりを東西方向で4.8m確認した。北区東トレンチまで合わせると延長は10.9mを測る。裾から30cm程上までは地山削出しで、薄い灰色の層を介在して、上位には地山起源の黄褐色粘土を盛土し構築している。昭和の調査で検出している築地とは幅にかなりの違いがあるが、北側の一段低いテラス状を呈する箇所を含まなければ、幅は2.8～2.9mである。また、北側に位置する整地と土塁との関係は今回の調査では明らかになっていない。

（4）整地（第3・4・7図、写真図版2・4・6）

範囲は北区と北区東トレンチで確認し、西区では整地層は現われていない。北区の大半は厚さ20～30cmの整地層で、土塁の北裾から北側を覆っている。整地層上には遺構を検出していないが、混じりが多い整地層のため確認できなかった可能性もある。整地層から上は20～30cmの現代の水田や畑の耕作層である。北区東トレンチでは、整地の厚さは40cmを確認している。＜出土遺物＞北区からは、小片で摩滅したかわらけが少量、石や植物遺体（桃類の種）が出土した。北区東トレンチからもかわらけの破片や、植物遺体（桃類の種）が出土した。

（5）柱穴（第4・6・7図、写真図版6・8）

6個を検出した。個々の属性は一覧表を参照願いたい。ここでは傾向について触れる。

＜検出状況＞西区から1個（P1）、北区から3個（P2・3・4）、北区東トレンチから2個（P5・6）検出した。北区のP3は南北に長い形状から、柱穴ではない可能性があるが、周辺の状況から何であるかは不明である。P4は土塁より上からの掘り込みである。同じくP5とP6も土塁上の掘り込みであるが、確認面は地山である。

№.	検出位置　層位	検出形状他	検出径（cm）	検出標高（m）	深さ（cm）	底面標高（m）	備考
P1	西区　地山	円形	[26]×30	34.36	-	-	位置確認のみ。北一部調査区外
P2	北区	円形か	23×[15]	34.10	16	33.94	西側調査区外
P3	北区	長楕円状	[60]×40	34.02	30	33.72	
P4	北区南　整地上	円形	20×18	34.14	22	33.91	東半部調査
P5	北区東トレンチ　地山	円形	23×20	34.08	29	33.79	西半部調査
P6	北区東トレンチ　整地	円形か	20×[12]	34.01	41	33.60	柱痕跡（幅7cm）西半部調査

（6）その他の遺構（第4・7図、写真図版2・6）

北区では整地の下面で一部周辺より低い箇所がある。西区検出の2号溝延長方向にあり、一連であれば距離は13～14mである。過去の調査では西側土塁に沿う様に南北方向の溝が両脇に通っているが、西区では南北方向に濁った範囲を確認している。サブトレンチの断面観察から層位が明瞭になるかと思われたが、溝であるかは不明で、浅いためか2号溝より南では痕跡を確認していない。

3　出土遺物（第9図、写真図版10）

今回の調査では、かわらけ、中国産磁器2点、国産陶器2点、瓦1点、種子少量等が出土した。12世紀段階で道路となっていた範囲が多いこと、後世の撹乱の影響が大きいのか出土量は少ない。観自在王院に伴う溝や整地層からの出土遺物も少なく、後者の影響が大きいのかもしれない。1号溝からは植物遺体（桃類の種、1/3程度）や小石程度で、2号溝から遺物は出土していない。東区の地山直上からかわらけの細片10点とロクロかわらけ1点(№1)、2cm大の鉄滓が1点、桃類の種5点が出土し

ている。以下種別毎に記載する。

かわらけは少量出土した。大半が細片のため、形状がわかるロクロかわらけ１点(№.１)を掲載した。

中国産磁器は白磁壺の破片が２点出土し、全点掲載した(№.２～３)。12世紀の物であるが、盛土や水田層からの出土であり、近代に周辺が撹乱された様子がある。

国産陶器は渥美の甕片が２点出土し、全点掲載した(№.４～５)。水田層から出土している。

銭貨は南区の水田層から明治の半銭銅貨(№.７)、北区の水田層から昭和13年の桐１銭青銅貨(№.８)、が出土しており、掲載した。

植物遺体（種子）は１号溝や東区の地山直上などから桃類の種が少量出土している。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、観自在王院跡南西側の範囲確認を行った。検出遺構は整地層、土塁跡、溝跡２条、柱穴６個である。以下遺構毎に記述しまとめに代えたい。

（１）土塁跡について

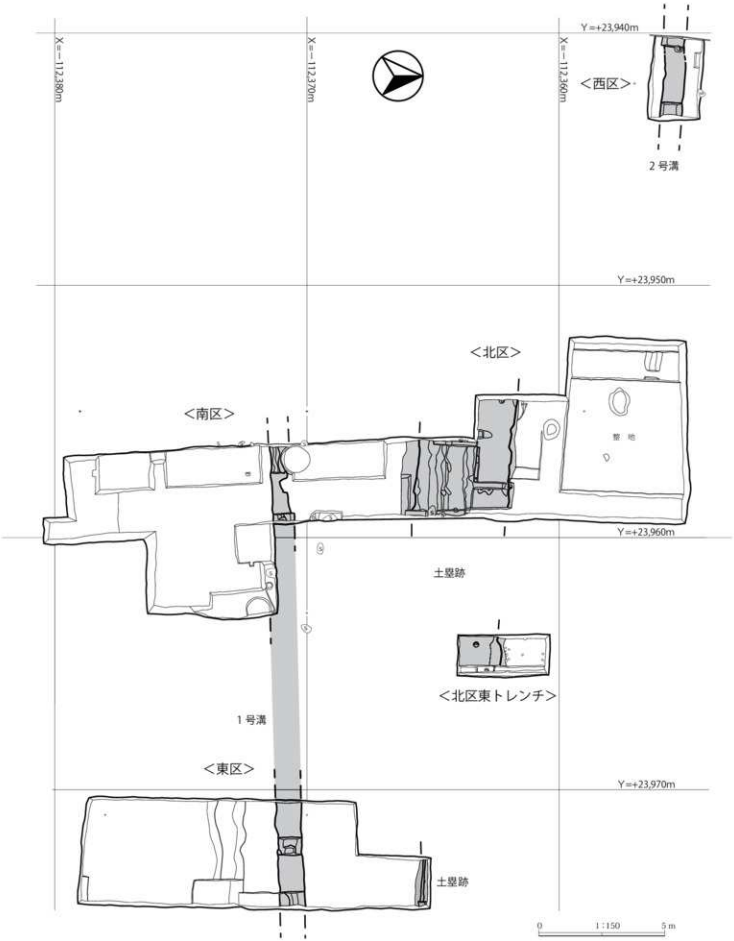
観自在王院南側を区画する土塁跡は、東区では北側に土塁跡の残欠と考えられる僅かな高まりを検出した。幅30～50cm、高さ13～15cmの小山状の断面で、東西方向の距離は1.９mである。北区では、40～50cm程度の高まり部分が、幅4.５m、東西方向に4.８m続いており、北区東トレンチまで合わせると10.９mの距離を測る。裾から30cm程上までは地山であるが、薄い灰色の層を介して上には、地山起源の黄褐色粘土を盛土し構築しているが、明瞭な版築の痕跡は無かった。昭和の調査で検出している土塁跡との幅にかなりの違いがあり、今回の調査では北側の一段低いテラス状を呈する箇所を含まなければ、幅は2.８～2.９mであり、こちらが対応するのかもしれない。また、この撹乱の影響で北側の整地と土塁との関係を明らかにすることは出来なかった。

（２）溝について

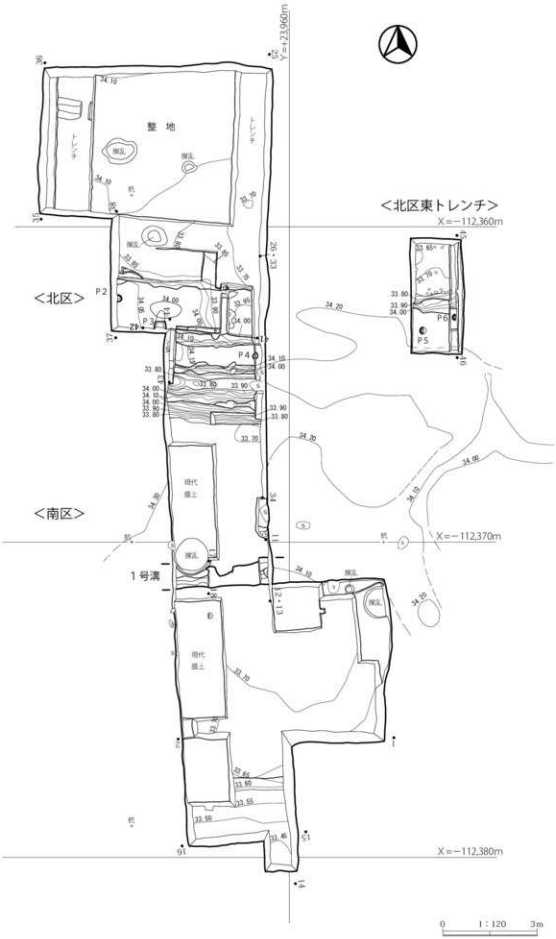
１号溝は東区の中央北及び南区中央において検出した。観自在王院の南側を区画する土塁の裾から溝中心まで東区で５m、南区で4.７～4.８m程の距離に位置する。昭和30･50年に行われた南門付近の発掘調査では南門と土塁跡（築地塀）とともに、門柱から4.８m南において東西方向の溝を確認している。溝の方向性と土塁との位置関係から、前述の調査で確認した溝と１号溝は一連の溝である可能性が高い。

２号溝は観自在王院の西側を区画する土塁の東隣りに位置する東西方向の溝で、人為的に埋め戻されていた。西側土塁と重復していないが、方向的に交錯することから、観自在王院より古い12世紀の溝である可能性が高い。

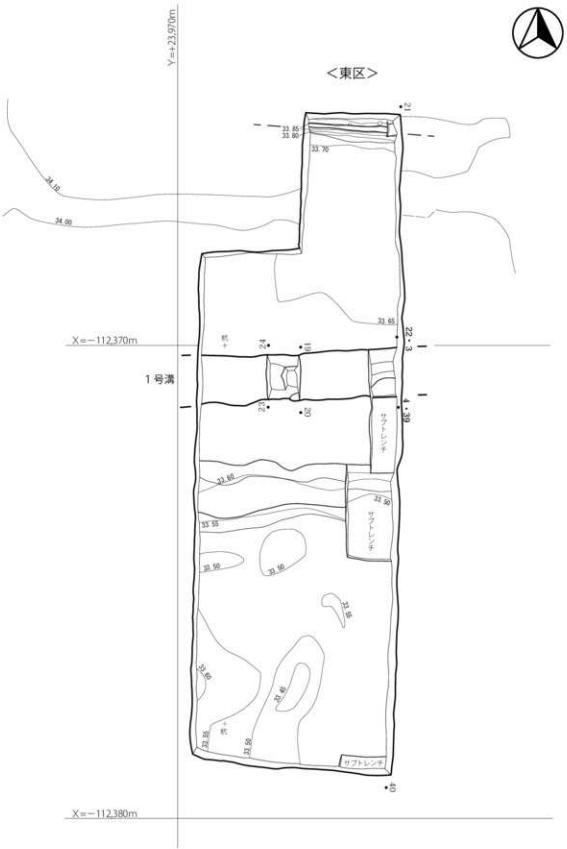
観自在王院南西側は、12世紀段階には毛越寺と観自在王院跡との間に介在する南北道と観自在王院南隣を東西方向に通る大路との交差部分で、12世紀当時の平泉の都市景観を考えるうえで重要な場所である。今回の調査では①道路の交差部分の状況、②観自在王院の西･南側の区画施設の様相を確認する目的で調査を行い、東西大路の北側道路側溝と観自在王院の南側を区画する土塁の残欠を確認した。しかし、土塁の残存状況は不良で、版築の様相を把握することができなかった。次年度以降、追跡調査を行い観自在王院南側の区画施設が土塁なのか築地塀なのか確認する必要がある。また、道路側溝の交差部分は来年度の調査予定地のため、その段階で把握する必要があり、12世紀当時の空間構成を復元するために必要な調査を行っていきたい。



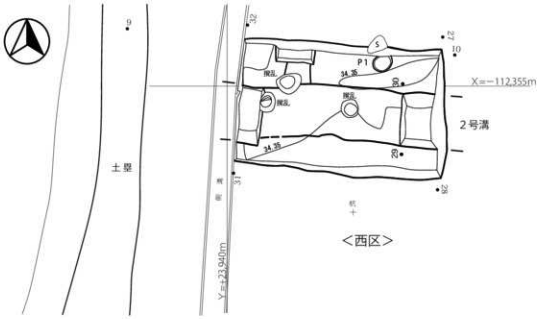
第３図　観自在王院跡第10次遺構配置図


Y=+23,960m
整 地
トレンチ
<北区東トレンチ>
X=−112,360m
<北区>
P2
P3
P4
P5
P6
<南区>
現代
盛土
1号溝
X=−112,370m
X=−112,380m
0 1:120 3m

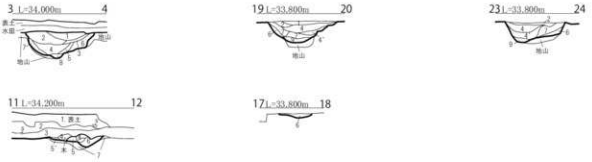
第４図　北・南区平面図


＜東区＞
Y=+23,970m
X=−112,370m
X=−112,380m
1号溝
サブトレンチ
サブトレンチ
サブトレンチ
22・3
4・39
21
20
19
18
17
40
33.80
33.80
33.70
34.10
34.00
33.60
32.80
33.50
33.50
33.50
33.50
32.50
32.40
32.40
32.30
32.30
32.50
0
1:80
2m

第５図　東区平面図



1号溝



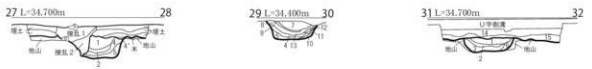
3-4・19-20・23-24共通

1. 2.5Y6/2灰黄色粘土 鉄分含 粘性あり
2. 2.5Y5/3暗灰黄色粘土 下位に15Y6/2灰オリーブ色粘土 砂の筋が灰オリーブ色粘土の間に堆積 8層黄下に灰含
3. 5Y6/2灰オリーブ色粘土 炭・鉄分含
4. 10YR7/8黄橙色砂 側面側に12.5Y6/2灰黄色粘土含
4'. 2.5Y6/2灰黄色粘土 砂 鉄分含
5. 2.5Y6/2灰黄色粘土 2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック混入
6. 2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック 5Y6/2灰オリーブ色粘土含 鉄分含
7. 2.5Y4/1黄灰色粘土 5Y7/2灰白色粘土ブロック混入
7'. 5Y7/2灰白色粘土 2.5Y4/1黄灰色粘土混じる
8. 10YR5/8黄褐色砂 4層より粗い
9. 5Y4/1灰色～4/2灰オリーブ砂に2.5Y6/6明黄褐色混合する

11-12・17-18共通

1. 表土
2. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 砂・鉄分・炭含 5Y7/3浅黄色粘土ブロック少し混じる
3. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 水田層
4. 2.5Y4/2暗灰黄色 7.5Y6/1灰色粘土混入 水田層
5. 2.5Y7/2灰黄色粘土
5'. 10Y6/2オリーブ灰色粘土
6. 2.5Y7/3浅黄色砂 鉄粘土混じる
7. 10YR5/8黄褐色砂 地山

2号溝



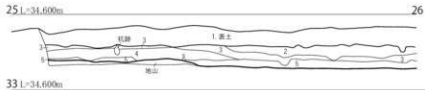
27-28・29-30・31-32共通

1. 10YR6/6明黄褐色粘土 砂含 下方は2.5Y6/3にぶい黄色粘土に2.5Y5/1黄灰色砂混じる
2. 10YR5/2灰黄褐色粘土 同砂少し混じる
3. 2.5Y7/2灰黄色粘土～砂 2.5Y4/1黄灰色の粘土～砂のブロック混入
4. 2.5Y7/2灰黄色粘土 2.5Y4/1黄灰色のシルトブロック混入
上方は2.5Y5/3黄褐色粘土多く含
4'. 10YR5/8黄褐色粘土 水田の影響か 根入る
5. 5Y7/1灰白色粘土ブロック 間には5Y6/1黄灰色や2.5Y4/1黄灰色の砂や粘土を含
6. 10YR6/6明黄褐色粘土 砂混じる 炭少し含
7. 10YR7/8黄橙色粘土 10YR4/1暗灰色砂筋状に入る
8. 2.5Y5/1黄灰色砂 10YR5/8黄褐色粘土小ブロック少し混入
9. 2.5Y7/3浅黄色粘土 10YR3/2黒褐色粘土や2.5Y6/2灰黄色
10. 2.5Y6/2灰黄色シルト 同砂混じる
11. 2.5Y6/2灰黄色シルト 同砂混じる 炭含
12. 2.5Y6/2灰黄色シルト 同砂混じる
13. 2.5Y7/1灰白色シルト 同砂混じる
14. 2.5Y3/2黒褐色砂 鉄分含 小石混入する
15. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 水分含 砂・炭含
掘見1. 建物基礎
掘見2. 10YR5/6黄褐色～5Y6/1灰色粘土 しまりない

0 1:60 2m

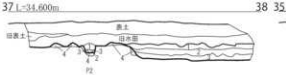
第６図　西区平面図・溝跡断面図

〈北区〉



25-26・33-34共通

1. 2.5Y3/1黒褐色シルト 炭・草根あり(耕作土か)
2. 10YR6/8明黄褐色粘土 10YR5/2灰黄褐色粘土や砂 2.5Y7/4浅黄色粘土などブロック混じる
2' 10YR7/8黄橙色粘土 2層の縁かぶり層の影響層 10YR4/1褐灰色少し混じる
3. 10YR7/8黄橙色粘土 2.5Y7/4浅黄色砂混入
4. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土 10YR3/1黒褐色粘土ブロック多く混入 炭含
5. 10YR6/1褐灰色粘土 2.5Y7/2灰黄色粘土ブロック混入 炭含
6. 2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y7/2灰黄色粘土かブロック混入
7. 2.5Y7/2灰黄色粘土ブロック 2.5Y4/1黄灰色混入
8. 10YR6/8明黄褐色粘土 地山と思われるが部分的に5Y5/1灰色の砂や10YR3/4褐鉄色がドット状に入る
8' 10YR6/8明黄褐色粘土 地山
9. 10YR6/8明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色～2.5Y6/1黄灰色の粘土少し混じる
10. 10YR6/8明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色～2.5Y6/1黄灰色の粘土少し混じる 砂混じる
11. 5Y5/1灰色シルト 砂含 10YR6/8明黄褐色粘土粒状で少し混じる
12. 5B5/1青灰色 地山
13. 10YR2/2オリーブ灰色粘土 腐乱
14. 2.5Y4/3砂灰黄色粘土
15. 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y4/3褐灰黄色粘土 鉄分含 水田様
16. 2.5Y3/2黒褐色砂 腐乱
17. 10YR6/8明黄褐色砂 地山
18. 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y2/1黒色 小石・地山ブロックなど混入 現存畦土
18' 表土と灰色粘土ブロック混じる 腐乱
19. 灰色粘土 畦土
20. 黒褐土水田様腐乱る 畦土
21. 2.5Y4/3砂灰黄色粘土 砂・鉄分・炭含 5Y7/3浅黄色粘土ブロック少し混じる
22. 2.5Y4/3砂灰黄色粘土 水田様
23. 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y2/1黒色 鉄分・地山ブロック混

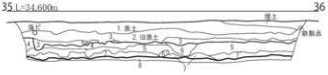


37-38

1. 10YR6/8明黄褐色粘土 2.5Y7/2灰黄色の粘土や砂・炭など少し混入
2. 5Y7/2灰白色粘土 10YR4/1褐灰色や10YR6/1褐灰色の砂や粘土 2.5Y6/3にぶい黄色の粗い砂など混じる
3. 2.5Y6/2灰黄色粘土ブロック 地山の2.5Y7/4浅黄色や炭を含
4. 2.5Y6/4にぶい黄色粘土 10YR/1灰色粘土や炭含

P2

1. 5Y6/2灰オリーブ色シルト 同粘土ブロック混入
2. 5Y5/3黄褐色粘土 炭含
3. 2.5Y7/4浅黄色粘土ブロックに5Y6/2灰オリーブ色シルト混じる
4. 2.5Y6/4にぶい黄色粘土 10YR/1灰色粘土や炭含



35-36

1. 10YR2/2黒褐色粘土ブロックや根など入る 表土
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト 砂・鉄分含 畦土か
3. 2.5Y4/1黄灰色粘土 砂・鉄分含 水田様
4. 2.5Y5/4黄褐色粘土 砂少し混じる 整地
5. 2.5Y5/4黄褐色粘土 2.5Y2/1黒色シルト多く混入 炭含
5' 5Y5/6オリーブ色砂のブロック
6. 2.5Y5/4黄褐色粘土 2.5Y2/1黒色シルト混入
7. 5Y5/2灰オリーブ色粘土 7.5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック混入炭少し混じる
7' 5Y5/2灰オリーブ色粘土 7.5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック混入炭混じる整地
8. 地山

41-42

1. 10YR6/6明黄褐色粘土 2.5Y6/1黄灰色や2.5Y6/2灰黄色砂など混じる
2. 2.5Y6/2灰黄色粘土 同色や10YR5/6黄褐色の砂を含 10YR6/6明黄褐色の小ブロック混入
3. 5Y7/2灰白色粘土 同砂少し混じる
4. 2.5Y5/2褐灰黄色砂
5. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土 地山
6. 2.5Y7/4浅黄色粘土 2.5Y6/2灰黄色の砂混入
7. 2.5Y7/4浅黄色 2.5Y6/2灰黄色6層より多く混入

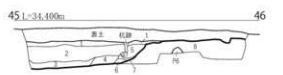
P3

1. 2.5Y7/2灰黄色粘土 2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロックや2.5Y6/3にぶい黄色砂混じる
2. 2.5Y7/6明黄褐色粘土 2.5Y6/3にぶい黄色砂少し混じる

43-44

1. 10YR6/6明黄褐色 2.5Y7/2灰黄色粘土ブロックや2.5Y6/1黄灰色粘土混じる
2. 2.5Y6/2灰黄色粘土 同砂混入
3. 2.5Y7/2灰黄色粘土 同砂や2.5Y6/1黄灰色粘土混じる 炭含
4. 10YR6/6明黄褐色粘土 地山

〈北区東トレンチ〉



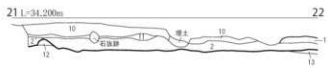
45-46

1. 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック 10YR3/2黒褐色粘土や2.5Y5/1黄灰色砂混入
2. 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック 10YR3/2黒褐色粘土や2.5Y5/1黄灰色粘土混入 下は3層灰黄粘土混じる
3. 2.5Y6/2灰黄色～2.5Y7/3浅黄色粘土 10YR5/6黄褐色粘土や2.5Y7/2灰黄色粘土粒状に混入
4. 3層に2.5Y3/1黒褐色が多く混入する
5. 10YR6/4にぶい黄橙色粘土 10YR4/1褐灰色砂や10YR3/2黒褐色シルト
6. 2.5Y6/1黄灰色粘土
7. 5Y7/1灰白色粘土
8. 2.5Y6/4にぶい黄色粘土 5Y7/1灰白色粘土 地山

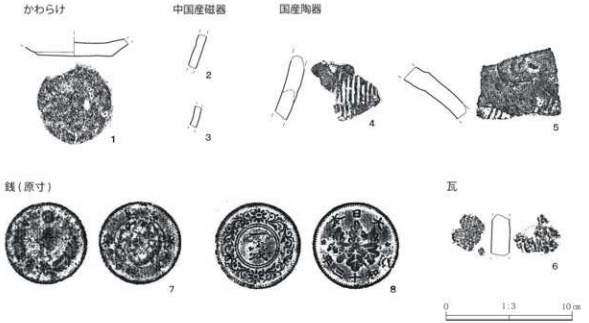
0　1:60　2m

第7図　北・北区東トレンチ断面図

〈東区〉



39 L=34.000m
40
13
12
9
7
8
13
6
13
14
5
1
3
4
1
5
1
2
1
1
1



第９図　出土遺物

第１表　かわらけ観察表

No	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	残存率(%)	備考	登録No.
1	9	10	南区 盛土中	ロクロ 大	－	6.0	－	40	底部	8

第２表　中国産磁器観察表

No.	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No.
2	9	10	西区 表土	白磁	碗	胴	12C	Ⅲ系	27-1
3	9	10	水田層上の盛土	白磁	碗	胴	12C	Ⅲ系	14-1

第３表　国産陶器観察表

No.	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No.
4	9	10	南区 水田層	瀬美	甕	胴	12C	押印あり	31
5	9	10	東区 南側水田層	瀬美	甕	胴～肩	12C	押印あり　上部釉あり	66

第４表　瓦観察表

No	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	法量(cm) 長さ	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚さ	重量(g)	備考	登録No.
6	9	10	東区 東トレンチ中央 水田層の下	平瓦	3.1	3.5	1.4	16.8	12C	26-1

第５表　銭貨観察表

No	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	大きさ(cm)	重量(g)	鋳造年代	備考	登録No.
7	9	10	南区 北盛土整地水田上位層	半銭銅貨か	2.2	3.1	明治	銭分付着	37-9
8	9	10	北区 南水田層	桐1銭青銅貨	2.3	3.6	昭和13年		60-3

第６表　石器観察表

No	図版	写真図版	出土位置・層位	種類	法量(cm) 長さ	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚さ	重量(g)	備考	登録No.
9	－	10	北区東トレンチ 整地層	石鏃	5.3	1.8	0.9	7.0		92-2

写真図版

調査区全景（西から）

南･北区全景（南から）

写真図版１　南･北区（１）

北区全景（南西から）

南区全景（北西から）

写真図版２　南･北区（２）

１号溝南区～東区（西から）

１号溝と既整備範囲との位置関係（西から）

１号溝全景（南東から）

１号溝検出（西から）

１号溝断面（西から）

写真図版３　南・東区

北区整地（西から）

北区断面25-26（西から）

写真図版４　北区

土塁（西から）

土塁断面（西から）

土塁（南から）

側溝検出状況①（西から）

側溝検出状況②（南から）

写真図版５　土塁跡

北区南整地層・土塁（北から）

断面37-38（東から）

北区西（東から）

Ｐ４（東から）

Ｐ５（西から）

Ｐ６（西から）

北区東トレンチ全景（西から）

北区東トレンチ断面（東から）

写真図版６　北区・北区東トレンチ

東区全景（西から）

東区全景（南から）

写真図版７　東区

1号溝検出（西から）

土墓基底部（東から）

1号溝（南から）

1号溝断面3-4（西から）

西区全景（南から）

西区全景（北から）

2号溝（西から）

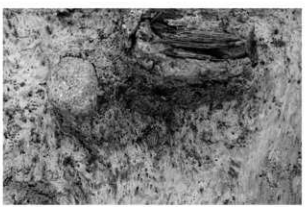
P1（北から）

写真図版8　東・西区

調査前の状況（東から）

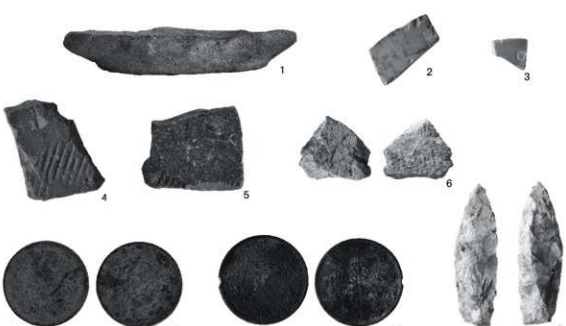
南区盛土かわらけ出土状況

№5　陶器出土状況



北区東トレンチ　遺物出土状況

写真図版９　調査前状況・遺物出土状況



写真図版10　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	めいしょうきゅうかんじざいおういんていえんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	名勝　旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ
副書名	第10次調査
巻次	
シリーズ名	岩手県平泉町文化財調査報告書
シリーズ番号	第135集
編著者名	島原弘征　鈴木江利子
編集機関	平泉町教育委員会
所在地	〒029-4102　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地２　電話(0191)46-2111㈹
発行年月日	西暦2020年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かんじざいおういんあと 観自在王院跡	いわてけん　にしいわいぐん 岩手県西磐井郡 ひらいずみちょう 平泉町 ひらいずみあざしらやま 平泉字志羅山地内	03402	NE76-1052	38° 59′ 15″	141° 06′ 35″	20181029～1203	185㎡	史跡整備を目的とした内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観自在王院跡	寺院	12世紀	溝 柱穴 土塁 整地層	かわらけ 中国産磁器 国産陶器 瓦 銭貨 石器	

要約

観自在王院跡南西側を対象とした内容確認調査報告である。

調査の結果、観自在王院跡の南側を区画する土塁や造営時の整地層とともに、土塁南から、毛越寺及び観自在王院跡の南に隣接する東西大路の北側側溝を検出したが、土塁と若干方向が異なっていた。道路南側の倉町遺跡の調査では、道路の拡幅とともに複数の時期変遷が辿れることから、今後の調査において確認が必要である。

岩手県平泉町文化財調査報告書第135集

名勝　旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ

―第10次調査―

印　刷　令和２年３月17日
発　行　令和２年３月31日

編集・発行　平泉町教育委員会
〒029-4102　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地２
電話　(0191) 46－2111 (代)　FAX　(0191) 46-2015

印　　刷　川嶋印刷株式会社
〒029-4194　岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話　(0191) 46－4161

© 平泉町教育委員会 2020